

# 比 恵 50

—比恵遺跡群第106次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書1000集

2008

福岡市教育委員会

# 比 恵 50

－比恵遺跡群第106次調査報告－  
福岡市埋蔵文化財調査報告書1000集



遺跡番号 HIE-106  
調査番号 0622

2008

福岡市教育委員会

## 序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。の中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは行政に課せられた責務あります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する比恵遺跡群の発掘調査報告書は、共同住宅建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では弥生時代の墓と集落、および古墳時代の溝を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2008年3月17日

福岡市教育委員会  
教育長 山田 裕嗣

## 例 言

口本報告書は博多区山王1丁目165-1の共同住宅建設に伴って2006年6月12日から8月11日にかけて発掘調査を行った比恵遺跡群第106次調査の報告書である。

口本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。

口遺構実測は大塚正樹と屋山が、遺構の写真撮影と遺物実測・写真撮影は屋山が担当した。

口本書で用いた方位は磁北で、座標北より6°、真北より6°18'西偏する。

口遺構・遺物番号はそれぞれ通し番号とした。

口本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

遺跡調査番号	0622	遺跡番号	020127	分布地図番号	東光寺37
調査地地番	福岡市博多区山王1丁目165-1		遺跡略号	HIE-106	
開発面積	238.08m <sup>2</sup>	調査面積	192m <sup>2</sup>	調査原因	共同住宅建設
調査期間	20060612~20060811	担当者	屋山 洋		

## 本文目次

I	はじめに .....	1
II	調査の記録 .....	4
1	調査の概要 .....	4
2	弥生時代の遺構と遺物 .....	4
1)	壇棺 .....	4
2)	掘立柱建物群 .....	6
3)	黒色包含層 .....	7
3	古墳時代の遺構と遺物 .....	11
1)	溝 .....	11
2)	土坑 .....	21
3)	その他の遺物 .....	21
4	小結 .....	21

## 挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図(1/25,000) .....	2
第2図	調査地点位置図(1/4,000) .....	3
第3図	調査区範囲図(1/200) .....	4
第4図	調査区全体図(1/100) .....	5
第5図	ST012遺構・遺物実測図(1/20・1/6) .....	6
第6図	掘立柱建物実測図(1/60) .....	7
第7図	黒色包含層出土遺物実測図1(1/3) .....	8
第8図	黒色包含層出土遺物実測図2(1/3・1/2) .....	10
第9図	SD001土層実測図(1/40) .....	11
第10図	SD001上層出土遺物実測図1(1/3) .....	13
第11図	SD001上層出土遺物実測図2(1/3) .....	14
第12図	SD001上層出土遺物実測図3(1/3) .....	15
第13図	SD001上層出土遺物実測図4(1/3) .....	16
第14図	SD001上層出土遺物実測図5(1/3) .....	18
第15図	SD001上層出土遺物実測図6(1/3) .....	20
第16図	SD001下層出土遺物実測図(1/3) .....	21
第17図	SP005出土石英長石斑岩片実測図(1/2) .....	21
第18図	SK015遺構実測図(1/30) .....	22

## 図版目次

図版1	1. I区全景(東から) .....	25
図版2	1. SD001土層(東から) .....	26
図版3	1. SD001木材出土状況(南から) .....	27
図版4	1. ST012(北西から) .....	28
図版5	1. SK015(北西から) .....	29
図版6	1. ST012上壇 .....	30
	2. ST012下壇 .....	
	3. SP005出土石英長石斑岩片 .....	

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経過

平成17年(2005年)12月6日付けで山田勝子氏から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に福岡市博多区山王1丁目165-1の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書(17-2-884)が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財である比恵遺跡群の中に位置しており、周辺の発掘調査でも弥生時代から古墳時代を中心とする集落等の遺構が確認されているため、申請地においても遺構の存在が予想された。そのため確認調査による遺構の有無の確認が必要と判断し、12月8日に重機を使用して確認調査を行ったところ、調査区中央部では現地表面から深さ74cmで黒色包含層上面に、84cmで地山である鳥居ロームに達し、その両面で遺構を確認した。その結果と建設予定建物の基礎設計を照らし合わせたところ、計画されている建物基礎では遺跡の破壊が避けられないため、建設に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を済することで両者の合意が成立した。以上の協議をうけて平成18年(2006年)6月から発掘調査を行うこととなり、実際には平成18年(2006年)6月12日から8月11日の期間で発掘調査を行った。

## 2. 調査の組織

調査主体 教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課

埋蔵文化財第1課課長 山口譲治

調査係長 (前)山崎龍雄 (現)米倉秀紀

調査庶務 鈴木由喜(文化財整備課)

調査担当 屋山 洋

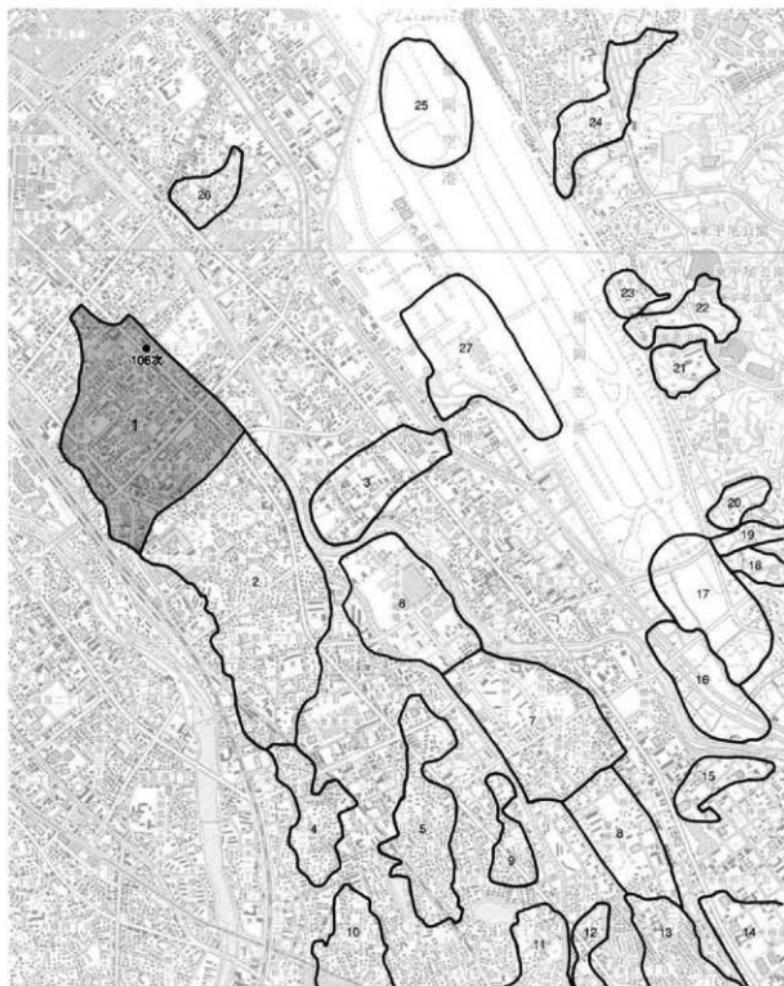
作業員 石川洋子 石田和子 乾 優夫 岩本三重子 大塚正樹 岡部安正 発野孝子  
桑原美津子 堀 正子 中島道夫 中村健三 濱地静子 吹春憲治 北條こず江  
前田佳代 水野由美子

整理作業 大石加代子 熊谷幸重 中村麻依子 藤野洋子 村上恵子

## 3. 立地と環境

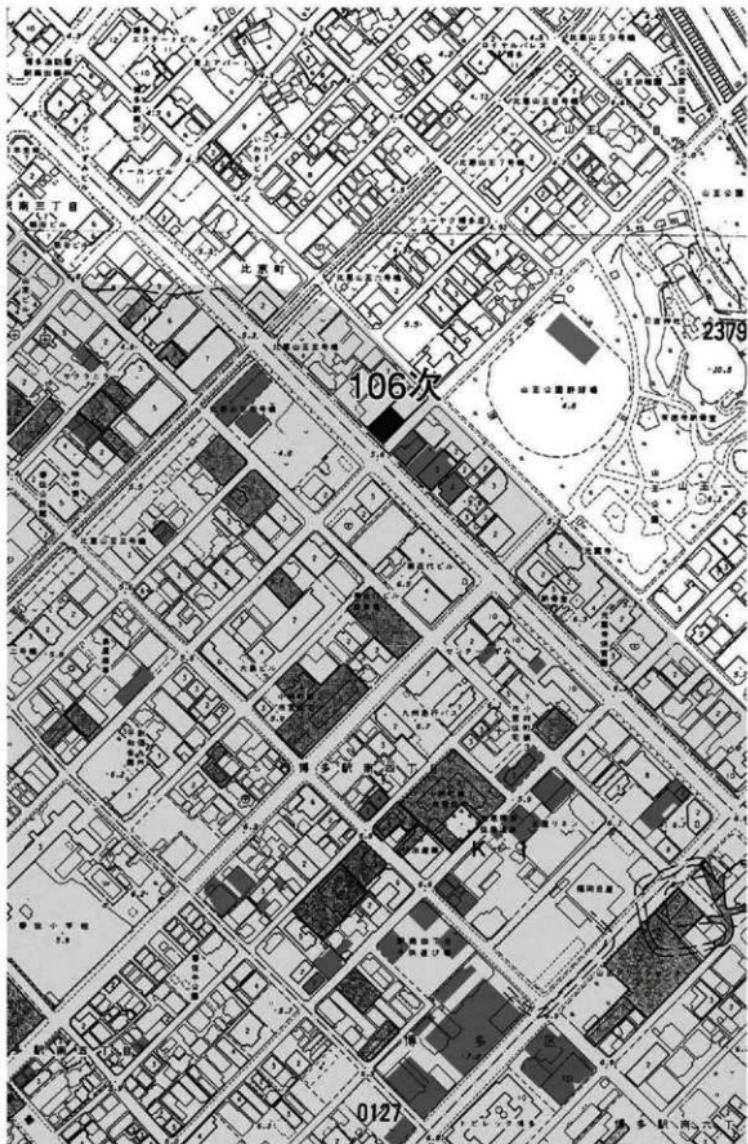
比恵遺跡群は福岡平野の中央を博多湾に向かって流れる那珂川と御笠川に挟まれた標高5~10mの低台地上に立地する遺跡群である。台地は阿蘇山の噴火火砕流である八女粘土層と鳥居ローム層からなり、鳥居ローム層の上面が遺構検出面となることが多い。近隣の遺跡としては春日市から伸びる丘陵上に比恵遺跡側から那珂遺跡、五十川遺跡、井尻遺跡群、須玖遺跡群と続くが、奴国の中である春日市の須玖遺跡群と博多湾を結ぶ台地だけに弥生時代から古墳時代前期にかけての遺構が多く見られる地域である。特に近年調査が進んだ井尻B遺跡では銅鏡や広型銅戈の鋳型と共に埴輪が出土するなど青銅器生産関連の遺物が多く出土しており、青銅器生産の拠点集落であることが判明すると共に、7世紀後半には宮衙及び寺院の可能性がある大型掘立柱建物群などがみつかり、遺物も「豊坪、山部坪」と線刻した瓦が出土するなど、その重要性が明らかになりつつある。

比恵遺跡群は南側に隣接する那珂遺跡と連続する遺跡で、弥生時代中期以降は奴国の大規模な集落として栄え、古墳時代になると那珂八幡古墳や東光寺剣塚古墳などの前方後円墳が築かれる。古墳時代後期から古代にかけては比恵遺跡側に大型の掘立柱建物群と柵列が見られるようになり、大宰府の前身である「那津官家」と考えられる。本調査地点周辺は現在ほとんど凹凸が見られないがこれは戦前の区画整理によるものであり、本来は丘陵とそれを開拓する谷部があり組んでいたものと思われる。今回の調査区は比恵遺跡の北東側端部にあたり、台地の北東端から約20mの地点に位置している。



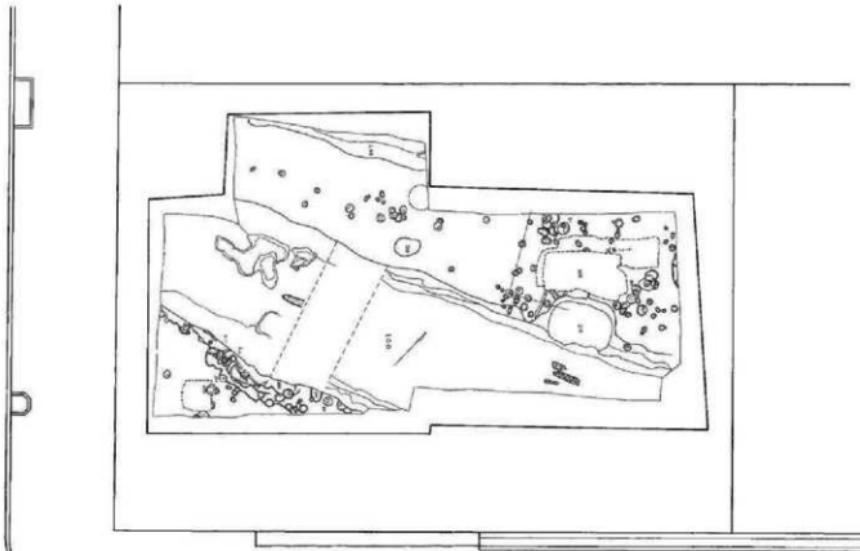
- |           |           |              |              |             |
|-----------|-----------|--------------|--------------|-------------|
| 1 比恵遺跡群   | 7 板村遺跡    | 13 麦野 A 遺跡   | 19 下月隈 B 遺跡群 | 25 上牟田遺跡    |
| 2 那珂遺跡群   | 8 高畠遺跡    | 14 井相田 C 遺跡  | 20 天神森遺跡群    | 26 東比恵三丁目遺跡 |
| 3 東那珂遺跡   | 9 諸岡 A 遺跡 | 15 井相田 D 遺跡群 | 21 宝満尾遺跡     | 27 省居遺跡     |
| 4 五十川高木遺跡 | 10 井尻遺跡   | 16 立花寺 B 遺跡群 | 22 廉田大谷遺跡群   |             |
| 5 諸岡 B 遺跡 | 11 笹原遺跡   | 17 下月隈 C 遺跡群 | 23 久保園遺跡     |             |
| 6 那珂君体遺跡  | 12 三筑遺跡   | 18 上月隈遺跡群    | 24 廉田青木遺跡群   |             |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点 位置図 (1/4000)

は比恵遺跡の範囲  
(平成20年2月現在)



第3図 調査区範囲図(1/200)

## II. 調査の記録

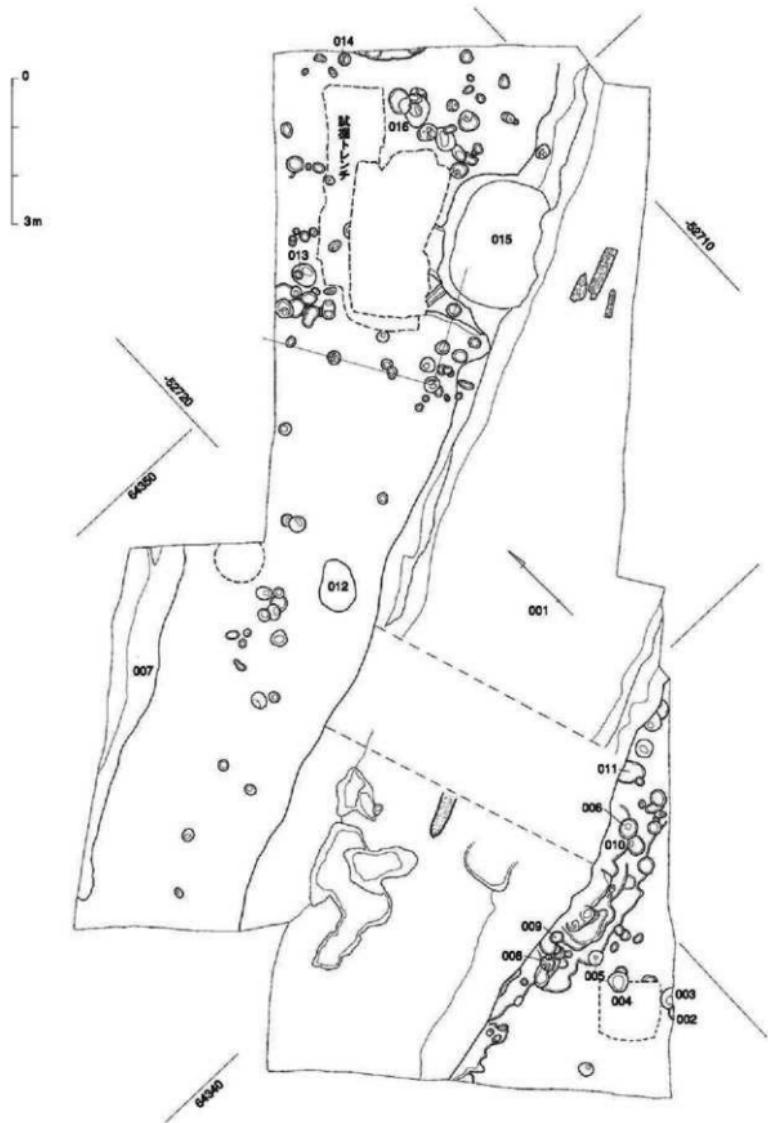
### 1. 調査の概要

現地表面から遺跡の調査面までの深さは84cmと深い。表土剥ぎで多量の廃土がであることから1度に全体の調査を行うことはあきらめ、建物予定地を東西に分けてまず西側の調査を行い、東側部分については西側の調査が終了した後に重機で打って返しを行ってから調査することとした。西側部分をI区、東側をII区として、まず6月13日に重機で西側の表土剥ぎを行いI区の調査を開始した。遺構は調査区の半分以上を溝が占めており、溝の深さが遺構検出面から1.1mと深かったため、膨大な量の廃土置き場を確保する必要があったため、休憩スペースなどもほとんどとれない状態となった。また、梅雨の時期に水気の多い溝の調査であり、溝や遺構から水が多量に湧きだし、雨の後には泥沼の中を這いずり回る様な調査となつた。その後7月14・15日に重機により打って返しを行い、II区の調査を行つた。I区と同様に調査区の半分を古墳時代初頭の溝が占める。その後8月10日に重機による埋め戻し、11日に器材の撤去を行つた。検出した遺構は弥生時代が包含層と小児棺1基に柱穴群、古墳時代前期は溝を1条と柱穴群、後は時期不明であるが貯水施設の可能性がある土坑を1基確認した。

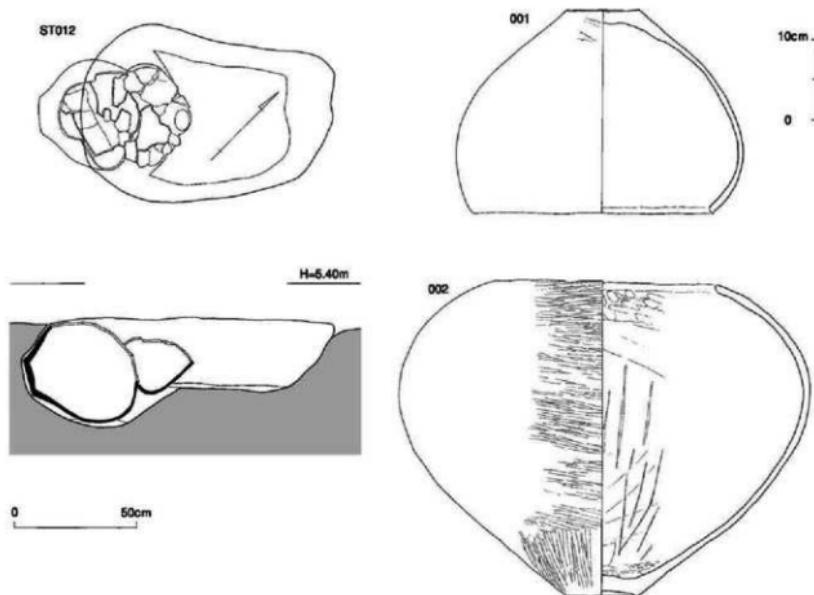
### 2. 弥生時代の遺構と遺物

#### 1) 墓棺

調査区中央北側で1基確認した。包含層や溝からは中期前半の汲田式から後期にかけての墓棺片も多く出土しているため、周辺に各時期の墓棺群が存在したものと思われる。



第4図 調査区全体図(1/100)

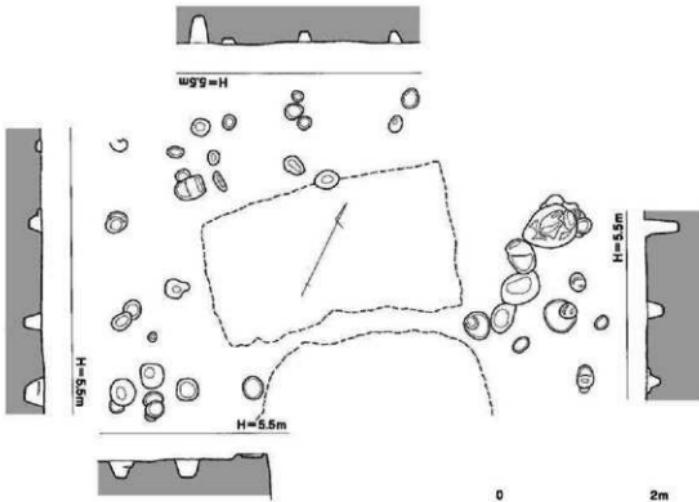


第5図 ST012造構・遺物実測図(1/20・1/6)

ST012(第5図)調査区中央、SD001の北側で検出した合わせ口の小児棺である。黒色包含層の上から掘り込み、墓壇の掘方は不正楕円形を呈す。土壤の南西隅を更に1段掘り下げて下壺を埋置している。棺は主軸をN-45°-Eにとる複棺で埋置角度は14°を測る。上下棺とも中型の壺の頸部から上を打ち欠いて棺として使用している。搅乱により上壺の1/3程度が削平されている。下壺は削平を受ける前に割れて内側に崩落しており、破片はほぼすべて残っていた。出土遺物(第5図001・002)。001は上壺である。中型壺の頸部から上を打ち欠いて使用している。最大胴径は34.3cm、現状の高さ27.6cmを測る。色調は外面が淡橙色～暗褐色を呈し、胸部下半に10cm強の黒斑がある。内面は暗褐色を呈す。調整は摩滅のため不明。胎土は粗く、1～3mm程の白色砂を多量に含む。002は下壺である。上壺同様に中型の広口口縁壺の頸部から上を打ち欠いて棺として使用している。最大胴径49.6cm、現状の器高38.3cmを測る。胸部はやや扁平で最大胴径から上は急に内湾しながら立ち上がる。調整は外面上半が横方向のミガキ、底部近辺は縦方向のミガキを施す。内面は全体的にヘラナデで、底部は指オサエである。遺存状態は悪いが外面には赤色顔料の上から黒色顔料を塗布したのがわずかに残る。内面は褐色を呈す。胎土中に1～2mmの白色砂を多く含む。焼成は良好である。上下壺から時期は弥生時代中期中頃と思われる。

## 2) 堀立柱建物群

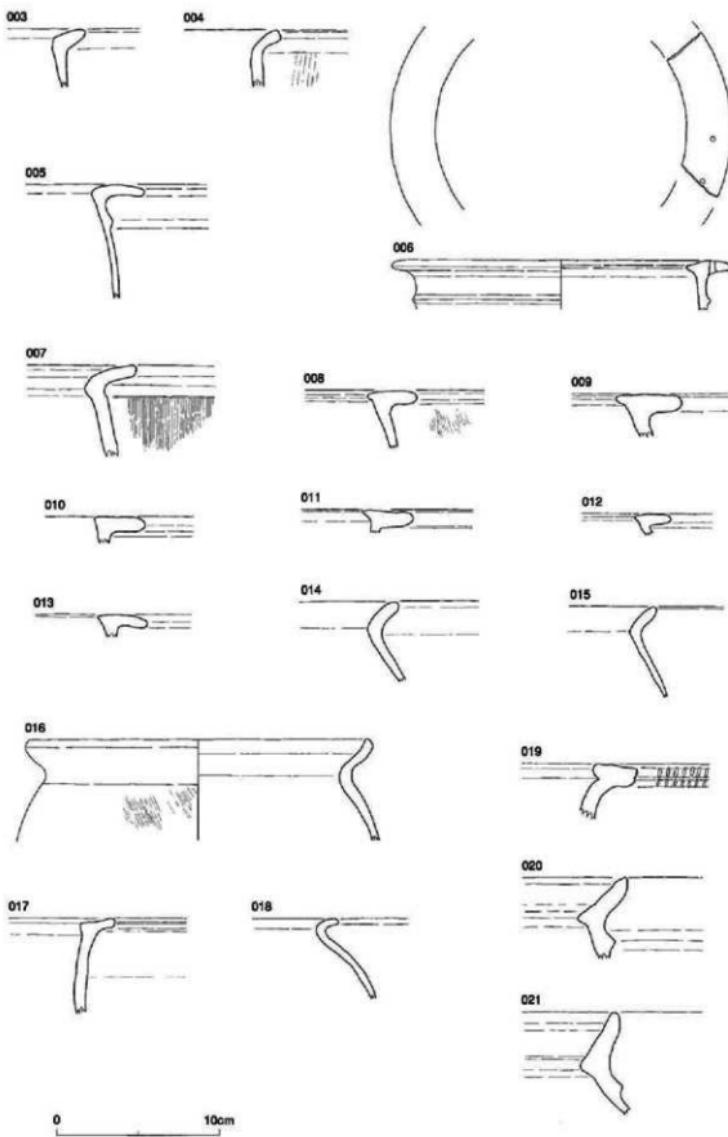
調査区の南西隅と北側で柱穴群を確認した。鳥栖ロームの上には黒色包含層が堆積しているが、柱穴群はその黒色包含層の上面で検出したものとその下の鳥栖ローム上面で検出したものがあり、最低2時期に分かれれる。図6は調査区北側の柱穴群であるが、明確な堀立柱建物は建たなかった。



第6図 摂立柱建物実測図(1/50)

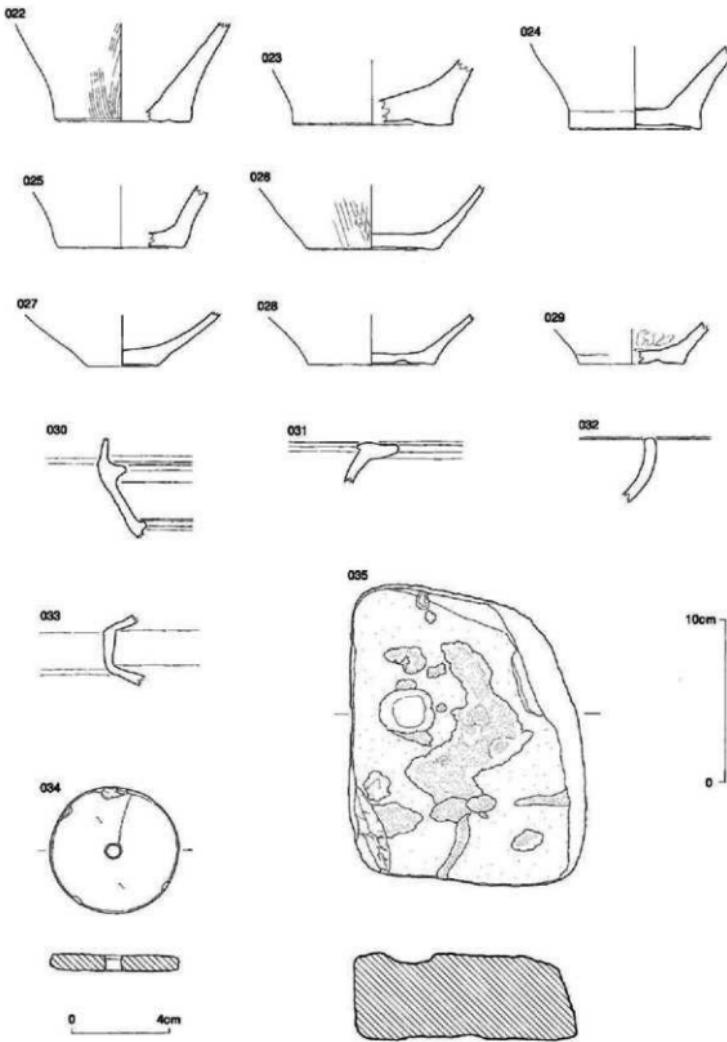
### 3) 黒色包含層

SD001に切られた場所以外では黒色包含層が堆積していたが、地山の島礁ロームが北側に向かって緩やかに傾斜しているため調査区南西端部では薄いが、調査区の北側では約30cmの厚さを測り、遺物が多く出土した。出土遺物（第7・8図 003～035）。003～016は甕口縁部である。003は淡橙色を呈し、胎土は粗く1mm程の白色砂を多量に含む。焼成は軟質で調整は不明である。004は橙白色を呈す。胎土は粗く1～3mmの砂を多く含む。調整は口縁から内面にかけては不明で外面胴部は縦ハケを施す。焼成は軟質で口縁の一部だけ遺存している。005は橙白色を呈す。胎土の粘土は粒子が細かいが部分的に1～3mm程の白色砂を多く含む。口縁は緩やかに外湾し口縁から2cm下に断面三角形の突帯がつく。調整は不明である。006は復元口径20.7cmを測る。内外面とも赤色顔料を塗布していたが、ほとんど剥落している。胎土に微小な砂と雲母片を少量含む。胴部はほぼ垂直、口縁は太めでわずかに外湾する。口縁部に蓋を止める孔が2つある。孔の径は上面で3mmほどであるが、下面では八の字に広がり6mmを測る。整形はやや雑で焼成は軟質である。007は外面暗橙色、内面灰白色を呈す。胎土は粘土は細かく、1～2mmの白色砂を含む。調整は口縁部は横ナデ、内面胴部は強い横ナデで胴部外面は縦ハケを施す。口縁直下に横ナデを施した際の稜線がつく。焼成はやや軟質で復元口径は約28cm前後を測る。008は内外面暗赤褐色を呈す。胎土の粘土は粗めで1mm程の白色砂を多量に含む。調整は内面が横ナデ、口縁上面にはハケを施す。胴部外面には縦ハケを施し、その後口縁部下面には横ナデを施す。009は内外面ともにぶい橙色を呈す。胎土中に白色砂を少量と微小な雲母片を多く含む。調整は全面横ナデである。口縁の一部のみ遺存している。010は外面橙白色、口縁部黒褐色、内面黄白色を呈し、胎土中に1～2mmの砂を多く含む。口縁の外端がやや下がる。調整は全面に横ナデを施す。011は暗橙



第7圖 黑色包含層出土遺物実測図1(1/3)

色を呈する。胎土は粗く1mm程の白色砂を多量に含む。調整は不明である。012はにぶい赤褐色を呈す。胎土に1~2mmの砂粒を多量に含む。調整は不明。口縁の一部のみ遺存している。013は暗茶褐色を呈す。胎土に1mm以下の中細な白色砂を多く含む。調整は不明瞭であるが、全面横ナデと思われる。014は橙黄褐色を呈す。胎土に1~2mmの白色砂を少量含む。外面は遺存不良で、内面は剥落が多く調整は不明である。015は橙褐色を呈す。胎土の粘土は細かいが、1~3mmほどの砂を部分的に多く含む。摩滅のため調整不明。焼成はやや軟質である。016は復元口径20.5cmを測る。外面は暗赤褐色で一部煤が付着して黒色、内面は橙褐色を呈す。胎土は精良で微小な白色砂と雲母片を少量含む。調整は丁寧に施されているようだが、摩滅のため不明瞭である。胴部外面は綾ハケ、口縁部は両面とも横ナデで、口縁部外面には斜め方向の線刻を施す。017・018は壺口縁か。017はL字型の口縁である。色調は灰黄褐色を呈し、胎土に1mm程の白色砂を多く含む。調整は全体に横ナデを施すが、口縁上面は指ナデである。焼成は軟質である。018は口縁から胴部にかけて遺存している。外面全面と内面の口縁部に赤色顔料を塗布している。内面胴部は明褐灰色を呈し、調整はナデを施す。胎土中に微小な白色砂を含む。019~021は甕口縁である。019は汲田式甕棺の口縁である。口縁端に刻み目を施す。色調はにぶい橙色で、胎土は粗く1mm程の白色砂を多く含む。調整は全面横ナデか。焼成は軟質で遺存状態は不良である。020は頸部内面に鋭い稜線を持つ。口縁は「く」の字型に立ち上がり、口縁下に断面三角形の突帯がつく。色調は赤褐色で胎土中に1~2mm程の白色砂を多量に含む。摩滅のため調整は不明である。口縁内面の中央に強いナデによる凹みがみられる。焼成はやや軟質である。021は020より口縁の立ち上がりが急である。色調は橙褐色を呈し、胎土中に1~2mmの白色砂を多量に含む。摩滅のため調整は不明である。焼成はやや軟質で口縁の一端のみ遺存している。022~029は甕及び壺の底部である。022は復元底径8.1cmを測る。外面は煤が付着しているため暗褐色を呈し、内面は明褐色を呈す。胎土中に1mm以下の白色砂を含む。調整は外面は綾ハケ、内面は不明瞭だがナデと思われる。023は復元底径9.8cmを測る。器壁は厚く、底部はやや上げ底である。外面は赤橙色、内面は黒褐色を呈す。胎土中に1~3mmの白色砂を多量に含む。調整は摩滅のため不明である。024は復元底径7.9cmを測る。外面は暗黄褐色、内面が黃白色、外底部は黒褐色を呈す。胎土中に1mm程の白色砂を多量に含む。調整は内面が不明。外面は上部がハケと思われ、底部から2cmは水平方向のナデと思われる。外底部は中心を軸にして板ナデを施す。025は復元底径7.6cmを測る。外面は暗赤橙褐色で一部煤が付着する。内面は暗黄褐色を呈し胎土中に1mm程の白色砂を多量に含む。調整は外面が綾ハケ、内面は不明瞭だがナデと思われる。焼成はやや軟質である。026は復元底径8.1cmを測る。外面は淡橙色、内面は暗黄白色を呈し胎土中に1mm以下の白色砂を少量と微小な雲母片を多量に含む。調整は内面が摩滅のため不明。外面は綾ハケ、底部は円状の板ナデを施す。027は壺の底部で復元底径4.1cmを測る。赤色顔料は風化のためほとんど遺存していない。胎土は赤橙色を呈し微小な雲母片と白色砂を多く含む。調整不明。焼成は軟質である。028は底径7.9cmを測る。外面は赤色顔料がわずかに残る。内面は橙白色を呈し、胎土は粘土粒が細かく白色砂を少量含む。調整は不明である。底部に葉脈痕が見られる。底部の4/5が遺存。029は復元底径6.4cmを測る。色調は褐色を呈し、胎土中に1mm程の白色砂を多量に含む。器表面には微小な雲母片が少量見られる。調整は内底部は指オサエ、外面はナデか。焼成良好。底部の1/3のみ遺存。030は瓢型土器の肩部である。外面は赤色顔料を塗布する。胎土はやや粗めで砂粒を少量含む。調整は外面が横ナデ、内面は摩滅のため不明である。031は高杯口縁部である。外面は淡橙色で内面は黒褐色を呈す。胎土は粘土は細かいが1~3mmの白色砂を多量に含む。調整は摩滅のため不明。焼成は軟質である。032は鉢口縁部である。外面に赤色顔料がわずかに残る。



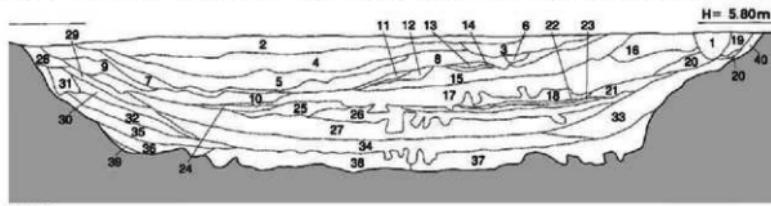
第8図 黒色包含層出土遺物実測図2(1/3・034は1/2)

内面は橙白色を呈す。胎土中に1~3mmの白色砂を多量に含む。調整は摩滅のため不明である。033は二重口縁壺の頸部である。色調は淡橙色を呈す。胎土の粘土は細かく、1mmほどの赤茶褐色の粒を含む。調整は頸部外面の一部に細かな繊維が残る他は不明である。034は安山岩製の紡錘形である。直径5.2cm、厚さ7mmを測る。中央孔は径6mmを測る。端部をわずかに欠く。現状で重さ31.4gを測る。035は砂岩製のタタキ石である。現状で長さ17.8cm、幅14.5cm、厚さ5.4cm、重さ2.3kgを測る。両面を叩き台として使用しており、中央部にわずかな瘤みが見られる。

### 3. 古墳時代の遺構と遺物

#### 1) 调査区中央で1条検出した。

SD001 調査区内での長さ22m、最大幅6.2mを測り、主軸をN-70°-Eにとる。断面は逆台形を呈し、深さ1.1m、底面幅4.6mを測る。土層(第9図)ではレンズ状(中央部はほぼ水平堆積である)中央部の23、29、37層の上面に見られる凹凸は人か動物の足跡である。粗砂を含む層は少なく、水が常時流れていた可能性は低い。比恵遺跡では多くの溝が出土しているが、この溝とつながる溝は今のところ不明である。周辺の調査が進んで、溝の全容が判る事を期待したい。出土遺物(第10~16図036~110)、036~106は溝の中層より上から出土した。036・037は蓋である。036は復元口径14cm、残存高1.7cmを測る。色調は外面は赤色顔料を塗布し放射状のミガキ、端部は横方向のミガキを施す。内面は暗灰褐色でナデを施す。胎土中に白色細砂を多く含む。037は復元口径15cm、残存高1.3cmを測る。色調は外面に赤色顔料を塗布し、放射状のミガキを施す。内面は灰黒色を呈す。端部から1.5cmの所に径2.5mmの孔を穿つ。胎土中に白色細砂を少量含む。038~045は壺である。038は弥生時代中期の広口口縁壺頸部である。頸部復元径18cmを測る。内外面とも赤色顔料を塗布する。外面は頸部に縱方向の暗文状のミガキ、肩部に横方向のミガキを施す。内面は頸部が横方向のミガキ、胴部にはナデを施す。胎土は精良で焼成は良好である。039は弥生時代中期~後期前半の壺底部である。復元口径5.4cm、残存高4.2cmを測る。色調は淡褐色で、調整は外面が縱方向のミガキ、内面が指オサ工後ナデ、底部にはナデを施す。胎土は白色細砂や赤褐色粒、雲母片を少量含む。040は壺底部である。底径4.8cm、残存高3.5cmを測る。底面はレンズ状を呈し、胴部外面にタタキを施す。胎土中に白色砂を多く含む。041は復元口径11.6cmを測る。色調は赤みを帯びた淡褐色で、調整は摩滅のため不明瞭であるが、全面ハケと思われる。胎土中に1mm前後の白色砂を多く含む。042は二重口縁である。復元口径26.6cmを測る。外面はにぶい黄橙色、内面は灰白色を呈す。摩滅のため調整は不明である。

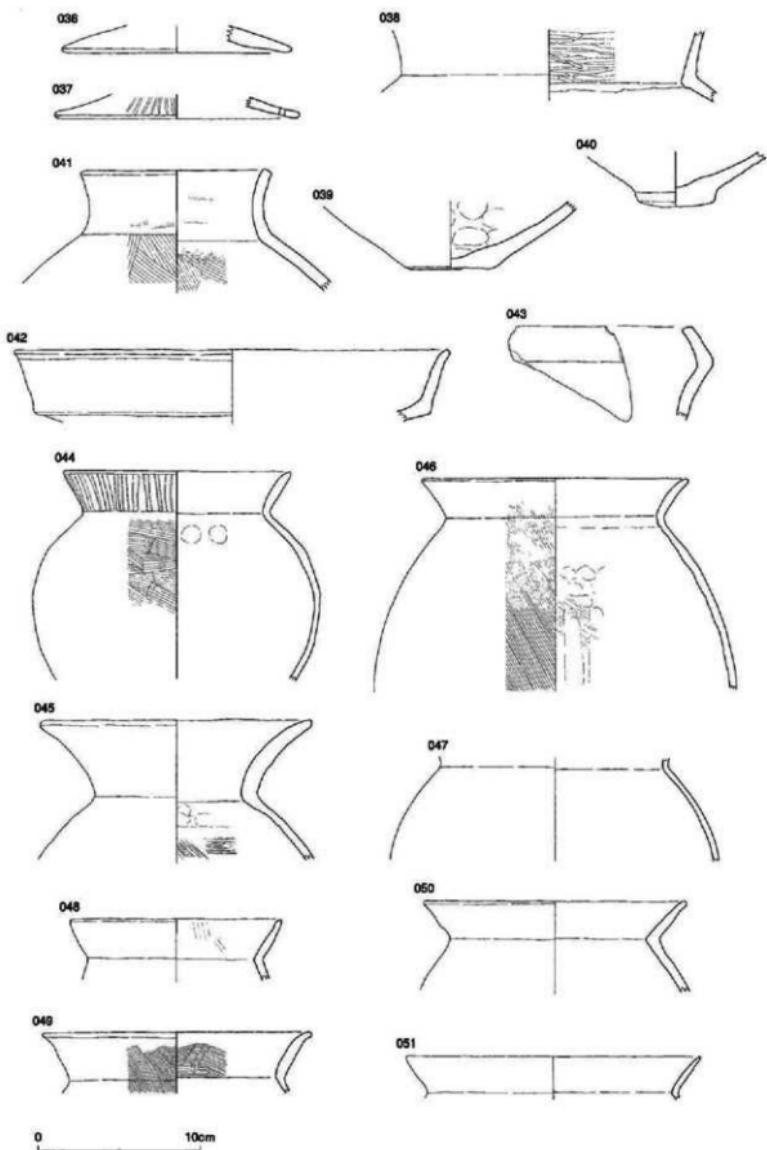


SD001 土層

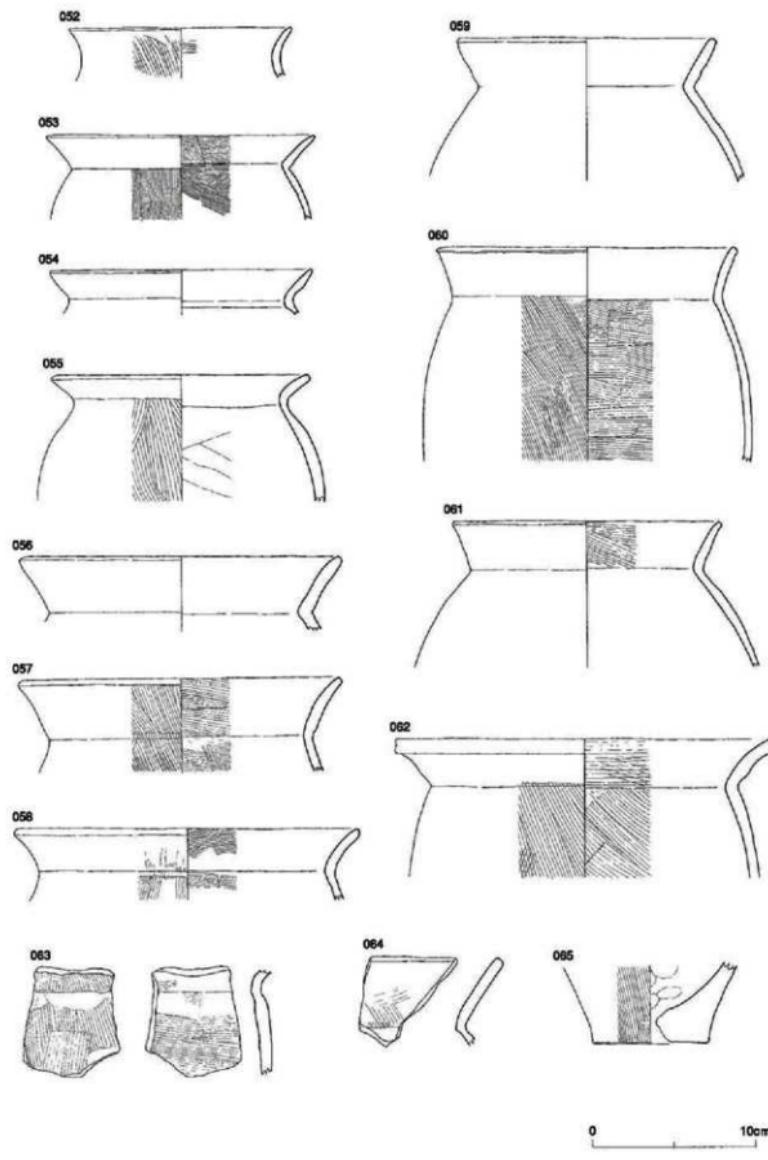
- |            |                       |           |                     |            |                      |
|------------|-----------------------|-----------|---------------------|------------|----------------------|
| 1. 暗褐色土    | 3mmのローム粒を多量に含む        | 15. 暗褐色土  | 8mmのローム粒を少く含む       | 29. 暗褐色土   | 3~10mmのローム粒を多量に含む    |
| 2. 暗褐色土    | 2mmのローム粒を含む           | 16. 暗褐色土  | 8mmのローム粒を少く含む       | 30. 暗褐色土   | ローム粒を右方に並んで含む        |
| 3. 暗褐色土    | 2mmのローム粒を多量に含む        | 17. 暗褐色土  | 8mmのローム粒を少く含む       | 31. 暗褐色土   |                      |
| 4. 暗褐色土    | 5mmのローム粒を層状に含む。土質多く含む | 18. 暗褐色土  | 8mmのローム粒を多量に含む      | 32. 明褐色粘土質 |                      |
| 5. 暗褐色土    |                       | 19. 暗褐色土  | 8mmのローム粒を多量に含む      | 33. 明褐色土   | 3~10mmのローム粒を層状に多量に含む |
| 6. 暗褐色土    |                       | 20. 暗褐色土  | 8mmのローム粒を多量に含む      | 34. 暗褐色土   | 2~3mmのローム粒を含む        |
| 7. 暗褐色土    |                       | 21. 暗褐色土  | 少量のローム粒と粗砂の土層を層状に含む | 35. 暗褐色土   | 2~10mmの粗砂土を含む        |
| 8. 暗褐色土    | 1~3mmのローム粒を下がりの層理状に含む | 22. 暗褐色土  | 2~3mmのローム粒を含む       | 36. 暗褐色土   | 1mmの白色粘土を含む          |
| 9. 深褐色シルト  | ローム粒と炭化物を多量含む         | 23. 暗褐色土  | 8mmのローム粒を少く含む       | 37. 暗褐色土   | 2~5mmのローム粒を多量に含む     |
| 10. 深褐色シルト | 粗砂を少く含む。ローム粒を含む       | 24. 暗褐色土  | 8mmのローム粒を少く含む       | 38. 暗褐色土   | ローム粒を左側より多く含む        |
| 11. 暗褐色土   |                       | 25. 暗褐色土  | 8mmのローム粒を多量に含む      | 39. 暗褐色土   |                      |
| 12. 暗褐色土   | 粗1mmのロームブロックを少く含む     | 26. 暗褐色粘土 | 8mmのローム粒を少く含む       | 40. 明褐色土   | ローム粒を抱き合む            |
| 13. 暗褐色土   |                       | 27. 暗褐色土  | 8mmのローム粒を少く含む       |            |                      |
| 14. 暗褐色土   | 2mm粒のロームブロックを含む       | 28. 暗褐色土  | 8mmのローム粒を少く含む       |            |                      |
| 15. 暗褐色土   |                       | 29. 暗褐色土  | 8mmのローム粒を少く含む       |            |                      |

第9図 SD001土層実測図(1/40)

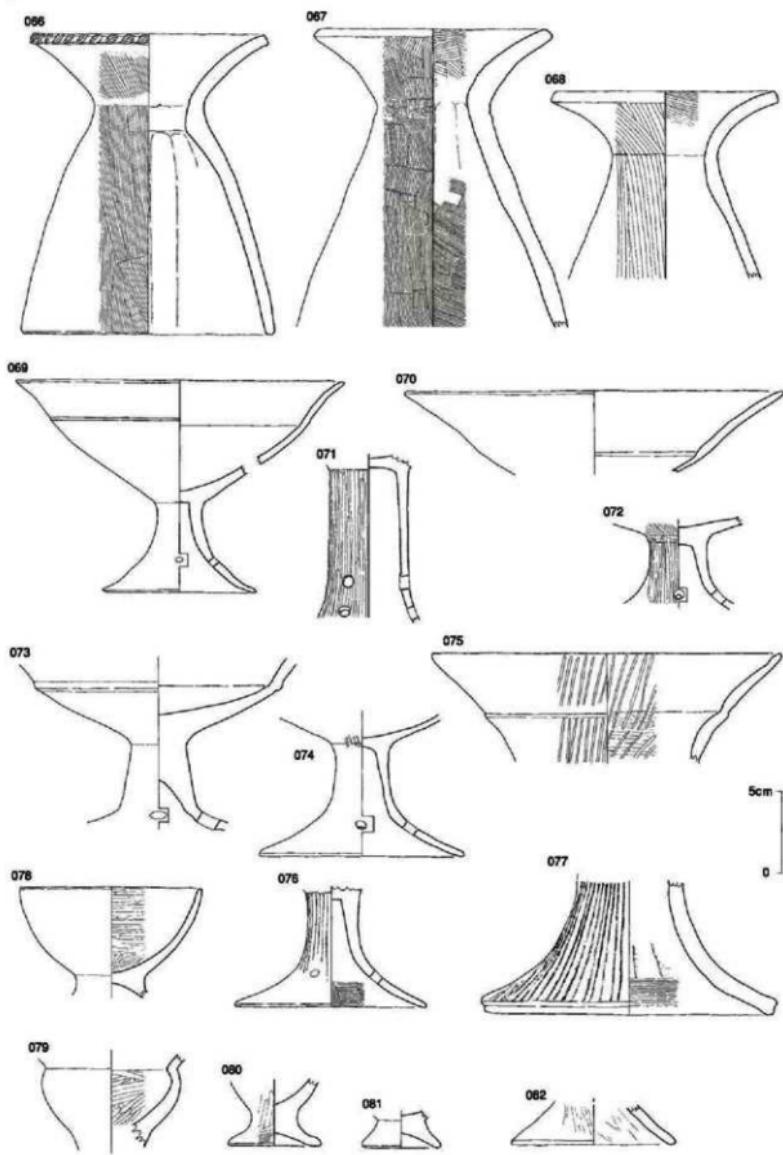
胎土中に白色砂を多量に含む。043は二重口縁である。外面が淡灰褐色、内面は暗灰色を呈す。調整は摩滅のため不明である。胎土中に白色砂を多く含む。044は復元口径13.8cm、復元最大胴径17.5cmを測る。淡褐色を基調に黒色、灰色などの斑である。調整は外面口縁が継の暗文風のミガキ、胸部が細かな横ハケ、内面は口縁部が横ハケ、胸部は不明瞭であるがヘラ削りと思われる。胎土中に白色砂を多く含む。045は復元口径16.6cmを測る。外面が明赤褐色、内面はにぶい赤褐色を呈す。調整は外面の口縁が横ナデで胸部がハケ、内面は胸部が横ハケ、頭部は指オサエである。胎土中に白色砂を多く含む。046～065は壺である。046は口径16.2cmを測る。色調は少し赤みを帯びた黄褐色を呈すが内面はやや白っぽい。外面の一部に煤が付着する。調整は外面が全面ハケ、内面は不明瞭であるが口縁は横ナデと思われ、肩部は指オサエ後ナデ、胸部はハケを施す。胎土中に白色砂を多く含む。047は頸部径が約14cmを測る。淡褐色を呈し、調整は摩滅のため不明である。胎土に砂を多く含む。細砂が多いが2mm以上の砂も少量混じる。048は復元口径13cmを測る。色調は外面が黄赤褐色、内面は暗褐色を呈す。調整は摩滅のため不明瞭である。胎土中に1mm程の白色砂と赤褐色粒を多く含む。049は復元口径16.4cmを測る。色調は外面が赤褐色～灰色で、内面は暗灰褐色を呈す。調整は外面が全面縦ハケ、内面は口縁が横ハケ、胸部はヘラケズリを施す。胎土中に1mm程の白色砂を多く含む。050は復元口径16cmを測る。色調は淡褐色で外面に黒斑がある。調整は不明で肩部に粗圧痕あり。胎土中に1mm程の白色砂を多く含む。051は復元口径18cmを測る。色調は淡い褐色～灰色で調整は摩滅のため不明である。胎土中に1mm程の砂を多く含む。052は復元口径13.6cmを測る。外面にはにぶい橙色を呈し縦ハケ、内面は明褐色で横ハケを施す。胎土中に白色砂を多く含む。053は復元口径16.4cmを測る。色調は暗赤褐色～灰黒褐色で内面はやや明るい。調整は外面口縁部がハケ後横ナデ、胸部は縦ハケで内面は全面にハケを施す。胎土中に1～2mmの白色砂を多く含む。054は復元口径約16cmを測る。灰褐色を呈し、調整は内面は不明で外面は横ナデを施す。胎土中に細砂を含む。055は復元口径15.8cmを測る。色調は黄赤褐色で内面はやや暗い。調整は口縁は不明。外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。胎土中に1～2mmの白色砂を多く含む。056は復元口径19.6cmを測る。色調は淡黄赤褐色を呈し内面はやや白っぽい。調整は摩滅のため不明である。胎土中に1mmほどの白色砂を含む。057は復元口径19.8cmを測る。色調は外面に煤が付着し、暗灰褐色を呈す。内面は淡褐色で少し赤みを帯びる。調整は内外面ともハケで口縁端部のみ横ナデを施す。胎土中に1mmほどの白色砂を多く含む。058は復元口径21cmを測る。色調は両面とも黄赤褐色を呈し、調整は内外面ともハケで部分的にその上からナデを施す。胎土中に1mmほどの白色砂を含む。059は復元口径15.8cmを測る。色調は外面が赤褐色、内面胸部は灰褐色を呈し、調整は外面は口縁部が横ナデ、胸部にタタキを施す。内面は摩滅のため不明である。060は復元口径18.4cmを測る。色調は淡褐色で外面に煤付着。内面最大径より下に焦げつきの痕跡あり。調整は外面が縦ナデ、内面には横ナデを施す。胎土中に白色砂、赤褐色粒、雲母片などを含む。061は復元口径16.4cmを測る。色調は薄い褐色を呈し、調整は口縁内面に横ハケが残るが、後は摩滅のため不明。胎土中に1mmほどの白色砂を多く含む。062は復元口径23cmを測る。色調は外面には煤が付着、内面は灰色を帯びた淡褐色を呈し、調整は胸部外面が縦ハケ、口縁は横ナデで内面は全面にハケを施す。胎土中に微小～5mmまでの白色砂を多く含む。063は口縁端を欠く。色調は黄褐色で外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。胎土中に1mmほどの白色砂を多く含む。064は口縁のみの遺存である。淡褐色を呈し、調整は外面がハケ、内面は摩滅のため不明である。胎土中に1～2mmの白色砂を多く含む。065は壺底部である。復元底径7.1cmを測る。色調は外面が赤みを帯びた淡黄褐色、内面が暗灰褐色を呈す。調整は外面がハケ、底部がナデ、内面は指オサエ後ナデを施す。底部中央に



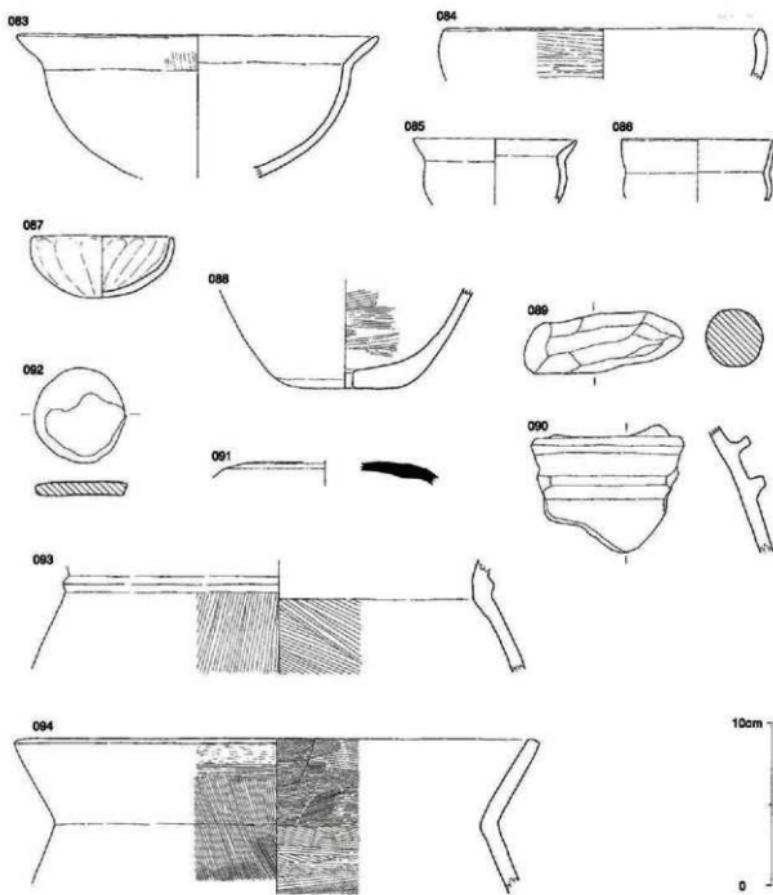
第10図 SD001上層出土遺物実測図1(1/3)



第11図 SD001上層出土遺物実測図2(1/3)



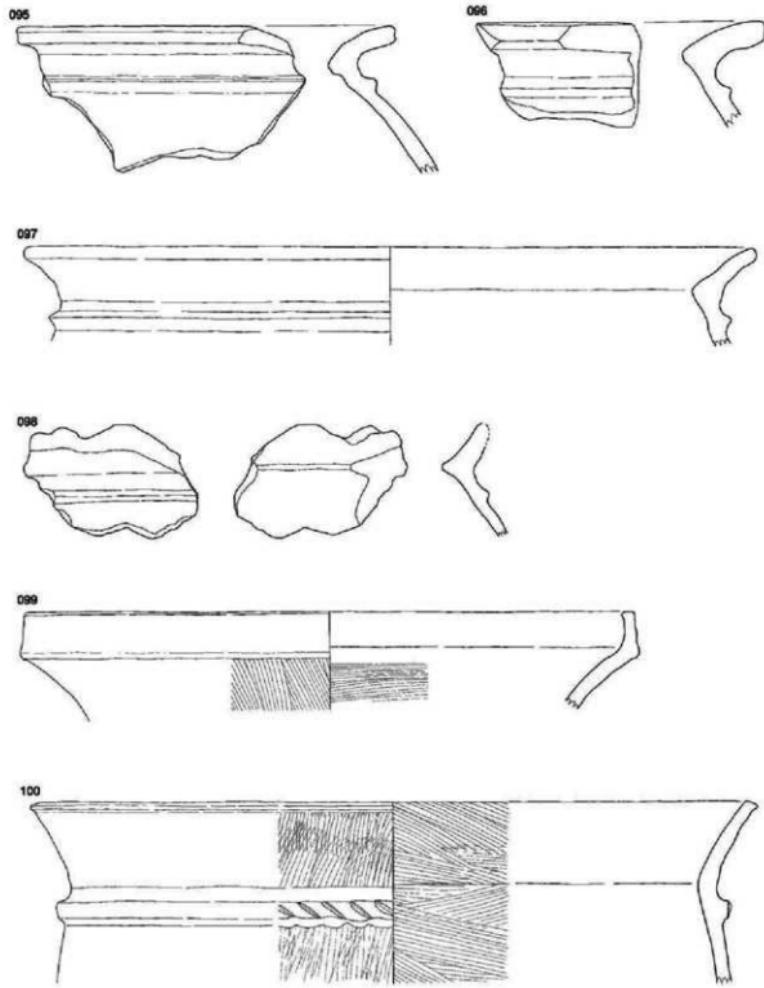
第12図 SD001上層出土遺物実測図3(1/3)



第13図 SD001上層出土遺物実測図4(1/3)

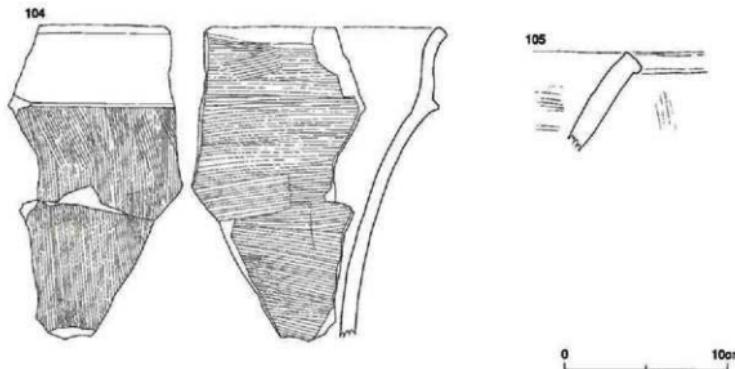
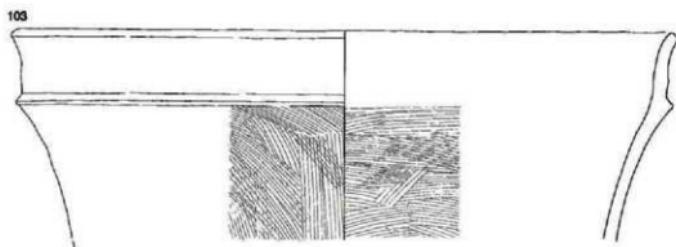
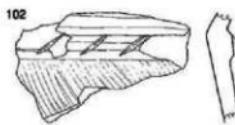
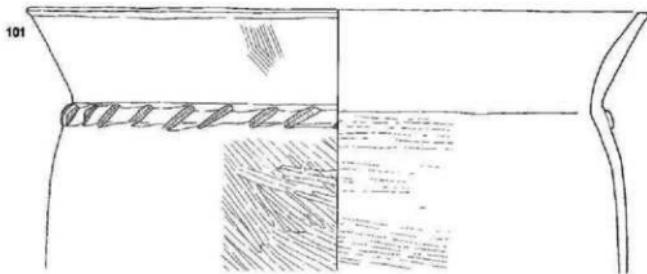
焼成後外面からの穿孔あり。胎土中に1~2mmの白色砂を多く含む。弥生時代中期中頃である。066~068は器台である。066は復元口径14.5cm、器高18.4cmを測る。色調は外面が灰色~褐色、内面は赤みを帯びた黄褐色を呈す。調整は摩滅のため不明瞭であるが外面が縦ハケ、内面は脚部が縦指ナデ、口縁はナデか。胎土中に1mm程の白色砂を多く含む。067は復元口径18.3cmを測る。色調は暗灰褐色から黄褐色を呈す。調整は外面が細かな縦ハケ、内面は口縁が横ハケ、脚部下半が横ハケ、上半は指ナデを施す。胎土中に1~2mmの白色砂を多く含む。068は復元口径13.8cmを測る。色調は淡褐色を呈し、外面の一部に黒斑が見られる。調整は外面が縦ハケ、内面は口縁部で横ハケを確認したが後は摩滅のため不明である。胎土中に白色砂と赤褐色粒を含む。069~077は高坏である。069は復元口径

20cm、器高約13cmを測る。色調は淡褐色を呈し、調整は摩滅のため不明瞭であるが、内外面ともにミガキと思われる。胎土精良。脚部の透かしは4方向に穿つ。070は復元口径23.2cmを測る。色調は外面がにぶい橙色で、内面は赤褐色を呈す。内面口縁部と坏部の境に段を持つ。調整は不明。胎土中に白色砂を多く含む。071は脚部上部のみである。残存高10.4cmを測る。色調は外面が赤褐色～黒褐色、内面は灰褐色を呈す。調整は外面がミガキ、内面はナデを施す。脚部下半に上下2段、3方向の穿孔あり。072の色調は灰褐色～赤褐色を呈す。調整は外面がミガキと思われ、内面は坏部にミガキを施す。脚部下半に円形の透かしがあるが数は不明である。073は残存高10.6cmを測る。色調はうすい褐色を呈し調整は不明。胎土中に白色砂を多く含む。074は復元底径12.5cmを測る。色調はにぶい黄橙色～赤褐色で、調整は摩滅のためほとんど不明であるが坏部と脚部の境にわずかにハケ目が残る。胎土中に白色砂を多く含む。075は復元口径21.3cm、残存高6.8cmを測る。色調はわずかに赤みを帯びた黄褐色を呈し、調整は外面が横方向のミガキの後に縦方向のミガキで暗文を施し、内面は横ハケ後に縦方向の暗文を施す。胎土は精良である。076は底径11.7cm、残存高7.5cmを測る。色調は白っぽい褐色を呈す。調整は外面がミガキ、内面は掘部に横ハケを施す。穿孔は径6mmで3方向に穿つ。077は復元底径18cm、残存高8.2cmを測る。外面は赤色顔料を塗布し、縦方向に暗文状のミガキを施す。内面は淡橙色で上部はナデ、下半は横ナデを施す。胎土は精良で細砂を少量含む。焼成は良好である。078は高台付鉢である。口径11.1cmを測る。色調は黄赤褐色を呈す。調整は不明瞭であるが、内外面ともにミガキを施す。内底部にハケ目の痕跡残存。胎土中に2～3mmの砂を多く含む。079は頸部から胴部のみの遺存である。残存高5.8cmを測る。黒褐色を呈し、内外面ともにミガキを施す。胎土中に砂粒を多く含む。焼成良好。080は復元口径5.7cmを測る。淡灰褐色を呈す。調整は外面脚部端にハケ目が残る他はヘラナデを施す。内面は不明。胎土中に白色砂を含み、焼成はやや軟質である。081は復元底径4.8cmを測る。色調は淡橙色を呈し、調整は不明である。胎土中に細砂を少量含む。082は高杯もしくは器台の脚部である。復元底径10cmを測る。外面にはにぶい黄橙色、内面は明褐色を呈す。調整は外面がミガキ、内面はヘラケズリを施す。胎土中に白色砂と、雲母小片を含む。083～087は鉢である。083は復元口径22cmを測る。色調はにぶい黄橙色を呈す。調整はわずかにハケ目の痕跡が残る。084は復元口径20cm前後を測る。色調は外面が赤色顔料の上から黒色顔料を塗布、内面は明褐色で一部に赤色顔料が付着している。調整は外面が横方向のミガキ、内面は横ナデを施す。胎土は精良で細砂を少量含む。焼成は良好である。085は復元口径10cmを測る。色調はにぶい黄橙色で、調整は不明である。胎土中に白色砂を多く含む。086は復元口径約9cmを測る。色調は淡赤褐色を呈し、調整は不明。胎土は精良である。087は口径8.7cm、器高3.8cmを測る。口縁端部をわずかに欠損するがほぼ完形である。色調は淡褐色を呈し、調整は縦方向のナデで、放射状の稜線が残る。胎土は細砂を多く含む。088は瓶の底部か。底部中央に焼成前の穿孔あり。色調は外面が灰白～青灰色、内面はにぶい橙色を呈す。調整は外面は不明、内面はわずかに横方向のハケ目が残る。胎土中に白色砂を多く含む。089は瓶の取手である。土師質で断面径3.5cmを測る。090は壺の頸部である。コの字型の突帯を2条貼り付ける。色調はやや赤みを帯びる灰褐色を呈し、調整は外面が横ナデ、内面はナデを施す。胎土中に白色砂を多く含む他、赤褐色粒や雲母片を含む。焼成は良好である。091は須恵器坏蓋である。色調は灰白色を呈す。調整は外面天井部が回転ヘラ削りで坏部は回転ナデ、内面は回転ナデ後に静止ナデを施す。胎土中に白色細砂を多く含む。調整は良好である。092は土製円盤である。甕胸部を使用しており径5.8cm、厚さ0.85cmを測る。暗茶褐色を呈す。093と094は大型の甕である。093は口縁を欠く。頸突部の復元径で約26cmを測る。外面はうすい褐色、内面は灰色を帯び、調整は外面が縦ハケ、

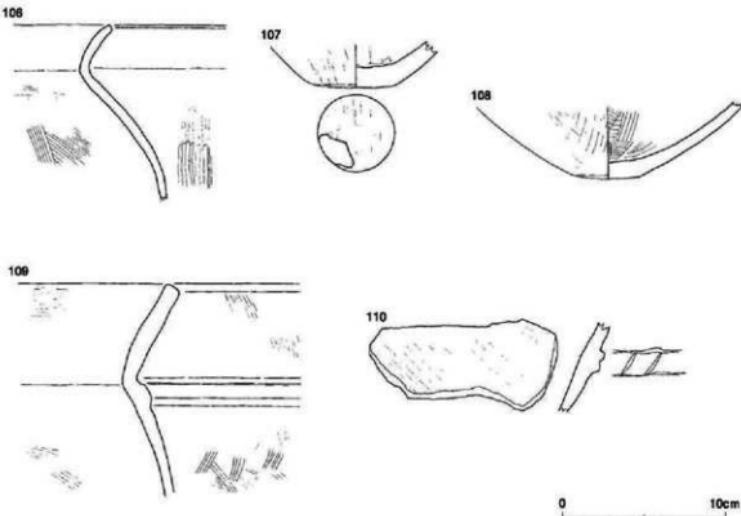


第14図 SD001上層出土遺物実測図5(1/3)

内面が斜め方向のハケを施す。胎土中に2~3mmの白色砂を多く含む。全体に摩滅が著しい。焼成は良好。094は復元口径32cmを測る。色調は内外面ともうすい褐色を呈す。調整は摩滅が著しいが外面は縦ハケ後口縁端に横ナデを施す。内面は口縁が細かな横ハケ、胴部にやや粗い横ハケを施す。胎土中に1~3mmほどの白色砂を多く含む。焼成はやや軟質である。095~105は壺棺である。095の推定口径は50cm程度である。口縁は緩く外湾しながら立ち上がり、頸部直下に断面台形の突帯が付く。色調は淡赤褐色を呈し、調整は全面にナデを施す。胎土中に白色細砂を多く含む他、赤褐色の粒や雲母片も含む。096は口縁がやや立ち上がり気味で頸部直下に断面が三角形の突帯が付く。色調は赤みを帯びた淡黄褐色で調整は全体に横ナデを施す。胎土中に白色細砂を多く含む。097は復元口径44.6cmを測る。口縁は直線的で「く」の字状に立ち上がる。頸部直下に断面三角形の突帯が付く。色調は赤みを帯びた淡褐色で、調整は摩滅のため不明である。胎土中に白色砂を多く含む他、赤褐色の粒も含む。焼成は良好である。098は口縁は内湾しながら立ち上がる。頸部直下に断面三角形の突帯が付く。色調は外面が少し赤みを帯びた褐色で、内面が灰褐色を呈す。調整は口縁部は横ナデ、それ以外は縦方向のナデを施す。胎土中に多くの白色砂と共に赤褐色粒を含む。099は復元口径約37cmを測る。色調は淡褐色を呈し、調整は摩滅のため不明瞭であるが口縁部内外は横ナデ、その他は外面が縦ハケ、内面は横ハケを施す。胎土中に白色砂を多く含む他、赤褐色粒を含む。100は復元口径44.2cmを測る。口縁は「く」の字に立ち上がり、わずかに外湾する。頸部直下に断面台形の刻目突帯が付く。色調は黄灰褐色を呈し、調整は外面が縦ハケ、突帯の上下は突帯を貼り付けた後強く横ナデを施す。内面は斜めハケを施す。胎土中に1mmほどの白色砂を多く含む。調整は良好。101は復元口径38cmを測る。頸部に刻目突帯が付く。色調は黄赤褐色を呈し、調整は不明瞭であるが外面口縁はハケの上からミガキ、胴部はミガキを施す。内面は横方向のナデである。胎土中に1~2mmの白色砂を多く含む。102は頸部片である。断面が台形の刻目突帯が付く。103は復元口径40.6cmを測る。色調は淡褐色を呈し、調整は口縁部内外とも横ナデ、その他は外面が縦ハケ、内面は横ハケを施す。胎土中に白色細砂と共に赤褐色粒や雲母片を含む。104は色調は黄褐色を呈す。調整は外面口縁が横ナデで頸部は縦方向のハケ、内面は口縁端が横ナデで、他は横ハケを施す。105は口縁のみである。色調はにぶい橙色を呈し、調整は不明瞭であるが、外面が縦ハケ、内面が横ハケと思われる。胎土中に白色砂を多量に含む。106~110は溝の下層から出土した。106は古墳時代前期の壺である。口縁はやや外湾しながら「く」の字型に立ち上がり、胴部はやや球形をなす。色調は外面の口縁から肩部が赤橙色で、外面胴部は煤が付着しており黒色で、内面は黒色を呈す。調整は不明瞭で胴部は縦方向のミガキ、内面胴部にはハケを施す。胎土中に1~3mmの白色砂を多く含む。107は弥生時代後期中頃の壺底部でやや底面がレンズ状にふくらむ。色調は外面が灰白色、内面は灰黃褐色から黒褐色を呈す。調整は外面が縦ハケ、内面に指オサエの痕跡が残る。胎土は粗く、1~2mmの白色砂を多量に含む。108は弥生時代後期後葉の壺底部である。色調はにぶい黄橙色を呈し外面には胴部の1/2をしめる黒斑がある。調整は外面が縦方向の粗いハケ、内面は横方向の細かなハケである。胎土は細かいが胎土中に1~3mmの白色砂を含む。109は壺棺口縁である。頸部直下に断面台形の突帯が付く。色調はにぶい橙白色を呈し、調整は不明瞭であるが外面が縦ハケ、突帯とその上下は突帯貼り付け時の横ナデが残る。内面は横ハケで胴部下半には縦ハケを施す。胎土は粗く1~5mmの白色砂を多量に含む。焼成はやや軟質である。110は弥生時代後期の壺棺胴部下半部である。断面逆台形で斜めの刻み目がある突帯が付く。色調は外面が灰黃褐色、内面がにぶい黄橙色を呈し、調整は外面が縦ハケで、突帯とその上下には突帯貼り付け時の横ナデが残る。内面は斜め方向のハケを施す。胎土は粗く0.5~3mm程の白色砂を多量に含む。焼成は良好である。



第15図 SD001上層出土遺物実測図6(1/3)



第16図 SD001下層出土遺物実測図 (1/3)

## 2) 土坑

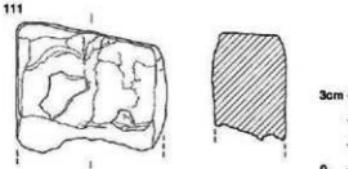
SK015(第18図)調査区北東側でSD001に隣接して検出した。黒色包含層の上面から掘り込まれている。平面は梢円形を呈し現状で長径2.6m、短径2mを測り、主軸をN-62°-Eにとる。断面箱形を呈し深さ1.2mを測る。長辺で両側から舌状の出っ張りがあり、土坑内はヒョウタン状に二つの円に区切られる。土坑の西端部に東西方向の溝が付く。溝は現状で残存長50cm、幅32cmで断面逆台形を呈し、深さ26cmを測る。東端では底部付近で壁が抉れている。覆土は暗褐色土で遺物は出土しておらず時期は不明である。黒色包含層の上から掘り込むが、SD001との切り合いは不明である。調査中に貯水施設ではないかとの教示を得た。SD001の水を引き込んだ可能性もあるが、調査中にも水がかなり湧きだし井戸であった可能性も考えられる。

## 3) その他の遺物(第17図)

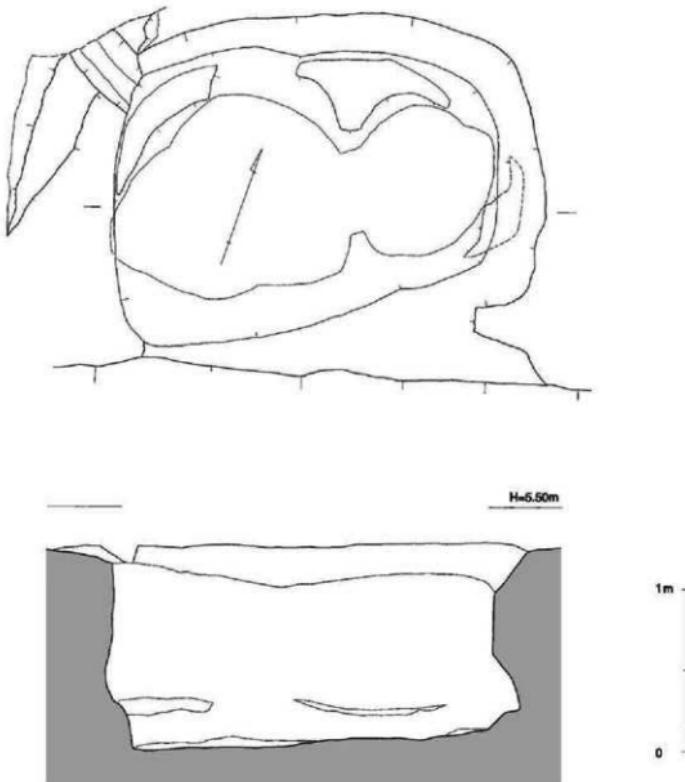
111はSP005から出土した石英長石斑岩片である。図の下半側が欠損しているが、現状で横6.1cm、縦4.94cm、厚さ3.51cm、重さ159.8gを測る。実測面は剥落による凹凸が多い。熱によるものであり、鉄型面であったと思われる。残りの面は破損面を除けば平坦である。

## 4. 小結

弥生時代中期の甕棺墓1基と柱穴群、古墳時代前期の溝1条と時期不明の土坑1基を検出した。甕棺は小兒棺1基であるが、包含層や周囲の遺



第17図 SP005出土石英長石斑岩片実測図 (1/2)



第18図 SK015遺構実測図(1/30)

構から中期前半から後期にかけての壺棺片が出土することから、周囲に壺棺墓群が存在すると考えられる。黒色包含層の時期は上から掘り込んだ小堀が弥生時代中期中頃から後半であるため中期前半から中頃にかけて形成されたものである。出土遺物(第7・8図)には弥生時代後期から古墳時代前期まで遡る遺物も出土しているが、これらは包含層の上から掘り込んでいた遺構の見逃しによるものと思われる。古墳時代前期の溝はこれまで発見された溝とつながるのか、全く新しい溝なのか今のところ不明であるが、その目的としては当調査地点は台地の先端部分に位置しており、これから下流はすぐ低地となるため、灌漑などの用途は考えにくい。SK015は遺物が出土しなかったため時期が不明であるが、調査中は常に水が湧いており、井戸の可能性も高いと思われる。北側の台地際部分の調査が進めばこれらの遺構の性格も明らかになる可能性がある。これからの調査の進展に期待したい。

# 図 版





1. I 区全景(東から)



2. II 区全景(西から)



1. SD001土層(東から)



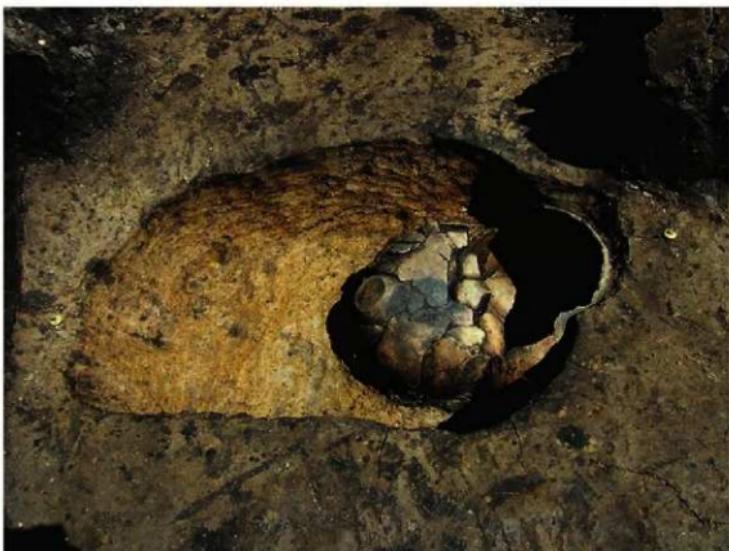
2. SD001土層(西から)



1. SD001木材出土状況(南から)



2. 黒色包含層堆積状況



1. ST012(北西から)



2. II区黒色包含層下全景(西から)



1. SK015 (北西から)



2. SK015土層（西から）

1.ST012上蓋



2.ST012下蓋



3.SP005出土石英長石班岩片



## 報告書抄録

書名 比恵50  
副書名 比恵遺跡群第106次調査報告  
巻次 50  
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書  
シリーズ番号 1000集  
編集著者 屋山洋 編集機関 福岡市教育委員会 発行機関 福岡市教育委員会  
発行年月日 2008年3月17日 郵便番号 810-8621  
住所 福岡市中央区天神1丁目8番1号 電話番号 092-711-4667  
所収遺跡名 比恵遺跡群第106次  
  
所在地 ふくおかけんふくおかしはかたくさんのう  
福岡県福岡市博多区山王1丁目165-1  
コード 市町村 40130 遺跡番号 020127  
北緯  $33^{\circ} 34' 44''$  東経  $130^{\circ} 25' 55''$   
調査期間 20060612~20060811 調査面積 192m<sup>2</sup>  
調査原因 共同住宅の建設 種別 集落  
  
主な時代と遺構・遺物  
弥生中期 壺棺墓一柱穴（土器）包含層（壺、紡錘車）  
古墳時代前期 溝（土師壺、高坏）一柱穴（土師壺、鉢）

福岡市埋蔵文化財調査報告書1000集

## 比恵遺跡50

-比恵遺跡群第106次調査報告-

2008年(平成20年)3月17日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 有限会社 アートプロセス  
福岡市南区高木2丁目16-24